

イギリスの空軍博物館訪問記 2 (帝国戦争博物館)

池内 健 (昭和40年卒)

2010年にロンドンに行ったときにはコーリンデールの他に帝国戦争博物館という勇ましい名前の博物館にも行きました。この博物館は大学の町ケンブリッジからバスで40分くらい離れたダックスフォードという田舎町にある広大な施設です。ここでは事前に予約をしておけば、昔の飛行機に乗せてくれるだけでなく、図1に示すような練習機で体験飛行が行え、上空で操縦桿を操作させてくれるそうです。



図1 体験飛行中の練習機デハビランド・タイガーモス(イギリス)

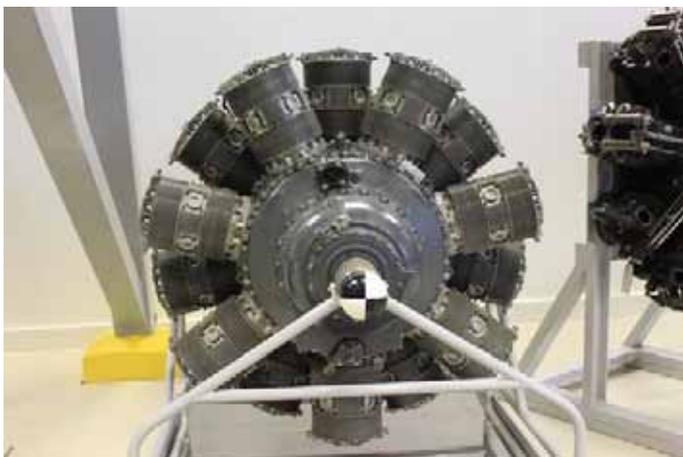


図2 スリーブバルブ付の星形エンジン (第2次大戦前・イギリス)



図3 水冷式エンジンロールスロイス・マリン(第2次大戦・イギリス)

展示場には昔のスリーブバルブ付の星形エンジン(図2)やアメリカでもパッカー・マリンとしてライセンス生産された水冷式エンジンのロールスロイス・マリン(図3)なども展示されています。飛行機では第1次大戦から現代までの航空機が多数立体的に展示されています。(図4)

屋外にも大型機が多数展示されています。中でも、図5に示す第2次大戦でナ



図4 垂直離着陸機ホーカー・シドレー・ハリヤー（上）とハンドレページ・ヘイスティングス（下）(イギリス)



図5 大型爆撃機ボーイングB17
(第2次大戦・アメリカ)



図6 大型爆撃機ハンドレページ・ヴィクター（1957年～・イギリス）



図7 ホーカー・シドレー・トライデント
(1962～・イギリス)

チスに対する勝利に多大の貢献をしたボーイングB17は現在でも飛行可能で、サリーちゃんという愛称で親しまれています。その後、アメリカ核兵器の搭載可能な大型爆撃機の開発を進めて世界で突出した軍事大国になっていきます。

この博物館には他に冷戦期の大型爆撃機B52ストラトフォートレス（アメリカ）もあるのですが、あまりにも巨大すぎて格納庫一杯の状態なので、写真に撮れませんでした。その後、アメリカでは大型爆撃機の生産は行われなくなりました。戦争の内容が変わり、巨額な開発費と生産費を費やす大型爆撃機が無用の長物となったのです。

そのほか屋外には図6に示すように旅客機も多数展示されています。イギリスは第2次大戦後に3種類の大型爆撃機を開発しました。図7に示すのはそのうちの一つのハンドレページ・ヴィクターです。しかしイギリスはこの飛行機を最後に大型爆撃機の開発を中止しました。イギリスの国力を考えるとこれは賢明な判断だったと思います。



図8 V1ロケット（第2次大戦・ドイツ）



図9 V2ロケット（第2次大戦・ドイツ）

帝国戦争博物館は戦勝国の立場から展示が行われていますが、それでも戦争の悲惨さが伝わってきます。敗戦国の日本はさらに悲惨な目にあいました。戦争に勝った国民は正義の戦いだと思いがちですが、負けた国民には恨みが残ります。第二次大戦を知る人も少なくなりました。平和とか平和主義とかを声高に叫んでも戦争は無くなりません。若い人には感情に流されず、日本と世界の情勢の変化に冷静に対応することを望みたいと思います。

この博物館には、飛行機の他に第2次大戦末期にドイツで開発された2種類のロケットが展示されています。このうちで図8に示すV1ロケットはパルスジェットと呼ばれる特殊なエンジンを備えています。これはエンジンの前の部分に一方弁を備えており、非燃焼時にはラム圧で弁が開いて空気が入り、燃焼時には燃焼圧で弁が閉じて空気が後方に噴射されるものですが、低速だったためイギリス空軍の戦闘機に撃墜されて役に立たなかったようです。

これに対して図9に示すフォン・ブラウンらによって開発されたV2ロケットは現在の液体ロケットエンジンと似た構造を持っています。というより、V2をもとに発達させたものが現在の液体ロケットエンジンというべきでしょう。このV2ロケットは超音速で飛ぶため迎撃が不可能でしたが、B17に爆撃されて壊滅状態になったドイツでは生産数が限られており、また現在のミサイルのような精密な誘導装置を持たないためその効果は限定的でした。

この博物館は修理部門も持っています。図10に示すのはアメリカ海軍の戦闘機グラマンF4Fワイルドキャットの修理中の写真です。第2次大戦の初期には高性能な日本海軍の零式戦闘機に苦戦しましたが、やがて数的有利に立つと、団体で戦って防御の弱い零戦を撃墜することが増えます。

さらに2,000馬力級のエンジンを装備したグラマンF6Fヘルキャット（図11）が用いられるようになると日本機を圧倒するようになっていきます。



図10 修理中のグラマン・ワイルドキャット
(第2次大戦・アメリカ)



図11 修理中のグラマン・ヘルキャット
(第2次大戦・アメリカ)

現在では部品の入手が困難になったこともあり、このような飛行機を修理するには10年以上の期間と何十億という資金が必要です。それでもイギリス人にとってはコツコツと修理して再び飛べるようにするのがこの上ない喜びのようです。1942年生まれの私が2歳から3歳になる頃でしょうか、畑で祖母の芋掘りを見てみると、小型の飛行機が低空を飛んで来ました。すると祖母は私を近くの穴に投げ込み、上から覆いかぶさってきました。その時私は祖母に殺されるかと思ったのですが、後から考えると私を機銃掃射から守るための行動だったようです。その頃、米軍の一部のパイロットはマンハントと称して日本人を機銃掃射して遊んでいたそうです。戦争も末期になるとお互いに恨みが連鎖して、どれだけ多くの市民を殺すかの勝負になりましたが、この時の飛行機はヘルキャットだったのかもしれない。

来世紀のエネルギーに関する見通し

昭和 28 年卒 羽田幹夫

エネルギー問題が世界的な関心を集めているが、今後の見通しについて議論してみよう。

現在地球上では化石燃料（石油、石炭、オイルシェール等）、原子力発電、その他の代替エネルギー発電（太陽光エネルギー利用の発電、風力利用の発電、地熱利用の発電、海水の干満利用の発電等）、米国で開発中のリチウムイオン - 水素電池など、色々な方法が試みられている。何れの方法も一長一短がある。例えば化石燃料は安価で入手が楽であり、熱量も高いが、燃焼した後の排気ガスには炭酸ガスが大量に含まれ、地球の温暖化を齎している。既に PM2.5 のような生物には有害な物質が放出されているため、中国のようにガスマスクを被らなければ生活できないような状態に追い込まれている。最近の世界中に広がった異常気象はその結果と言える。このまま放置すれば人類は 22 世紀を迎えずに滅亡する可能性を否定できない。原子力発電は温暖化には適切であるが、原子炉で発生する U235 の半減期（放射能が 1/2 になる期間）が 2 万 5 千年もあることを知らない人が多すぎる。

太陽光利用の発電は大規模なものを作るために、膨大な土地が必要になり、日本のような狭い国では土地の取得が困難であろう。北海道の広い原野が使用できれば可能性があるが、大規模発電には建設費が掛りすぎる上に、パネルの使用寿命にも問題がある。風力利用の発電はやはり広大な土地が必要であり、風車の翼や付属機器の寿命にも問題がある。寿命を 40 年以上とすると、材料の選択、台風時の対策等問題は多い。日本のような台風被害の多い土地では立地条件が厳しいものとなる。地熱利用は有効な対策であるが、これの問題は熱交換器の材料にある。地熱を得られるような火山の近くでは、高温水の中に硫黄が含まれていることが多く、ステンレス系合金鋼の応力腐食の原因となる。海水の干満利用発電については、発電効率、建設費等の点から採算割れが不安である。

このように見て行くと、22 世紀のエネルギー源としてはリチウムイオン - 水素電池が最有力と言える。これについては米国のアルゴンヌ国立研究所（現在先進的な研究で世界の最先端に行く研究所）が実用化、工業生産のための作業を進めている。パソコン制御で自動運転できる車と共に来世紀の主演となる。

蒸気タービンの歴史 (その 25)

The History of Steam Turbine

藤川 卓爾 (昭和 42 年卒)

転載元：火力原子力発電技術協会，
「火力原子力発電」，Vol. 61，No. 9，pp. 36-61，(2010-9)

13．社会のニーズに応じて

13.3 地熱タービン⁽⁵³⁾

13.3.1 地熱発電の歴史

地熱発電は自然エネルギーを利用する発電方式であり，純国産のエネルギー利用の代表選手である。

1904 年，イタリアのラルデレロにおいて世界で最初に地熱発電が行われた。地熱井から蒸気のみが発生する過熱蒸気型であったので，蒸気タービンを設置すれば直ちに発電ができ，早期に実用化されたものである。しかしながら，世界中の地熱資源のうち約 3/4 を占める熱水卓越型の地熱資源を利用した発電の実用化は遅れた。

日本の地熱発電の歴史は，1919 年(大正 8 年)に海軍中将山内 萬壽治男爵が別府で噴気に成功したことに始まるが，このときは発電には至らなかった。その後，東京電燈(株)の研究所長の太刀川 平治博士がこの地熱井を用いて，1925 年(大正 14 年)に 1.12kW の発電に成功し，約 1 年 5 ヶ月間運転された。戦後，地質調査所が別府の白滝地獄で試験井の掘削に着手し，乾き蒸気の噴出に成功して，30kW の発電設備を用いて 1951 年(昭和 26 年)から 1954 年(昭和 29 年)まで運転した。

本格的な地熱発電所としては，1966 年(昭和 41 年)に岩手県の松川で日本重化学工業(株)が地熱発電を開始した。松川はイタリアのラルデレロと同じ蒸気卓越型である。翌年に大分県の大岳で九州電力(株)が地熱発電を開始した。大岳発電所は熱水卓越型である。

その後 40 年余の歳月が経過し，現在，世界では総出力約 10,000MW，日本では東北，九州を中心に 18 地点 21 プラント，総出力約 530MW の地熱発電設備が稼働している⁽⁵⁴⁾。

13.3.2 地熱発電のしくみと蒸気タービン

地熱発電のしくみは，一般的には図 53 に模式的に示すように，地下から取り出し

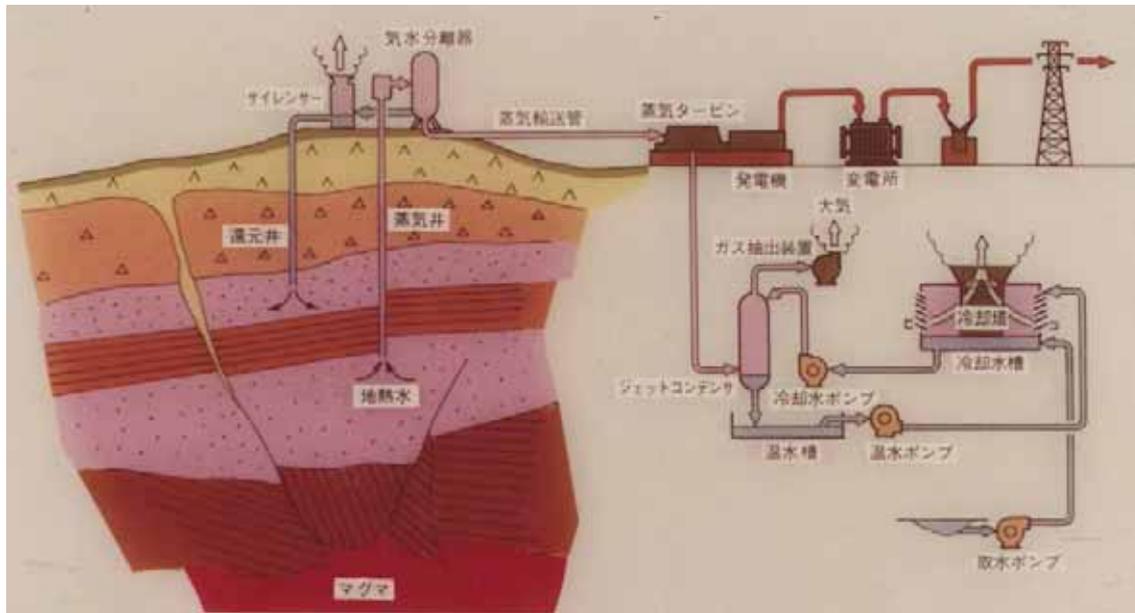
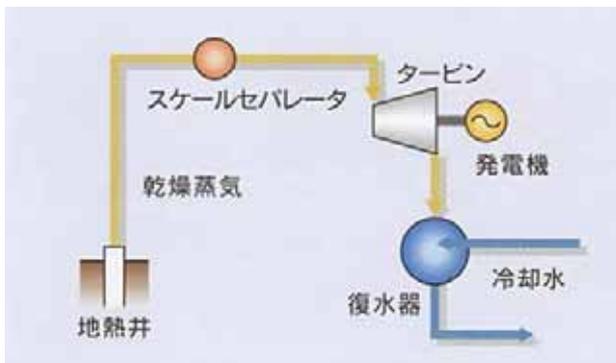
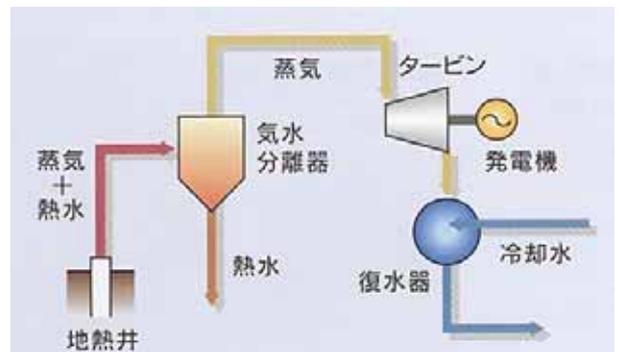


図 53 地熱発電のしくみ [提供] 三菱重工業(株)

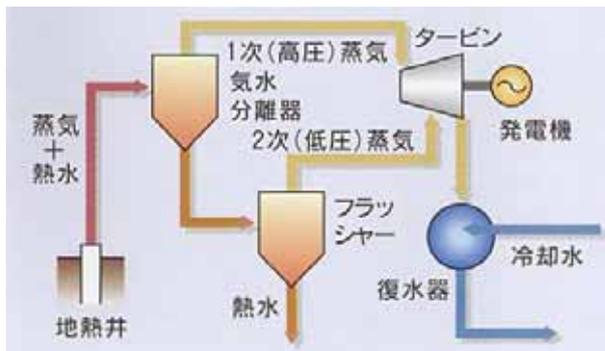
た地熱流体を利用して蒸気を取り出して蒸気タービンと発電機によって発電するものである。通常の火力発電プラントにおいて地球がボイラの役目を果たしているといえる。地熱発電には、地熱資源の性状，利用の仕方，排気の処理方法等によって色々なサイクルがある(図 54)。過熱蒸気型で背圧タービンを用いるものは最もシンプルである。熱水卓越型の直接利用・復水型にはシングルフラッシュサイクルとダブルフラッシュサイクルが実用化されている。後者は、汽水分離器によって蒸気と熱水の混合流体から 1 次蒸気を分離した後の熱水をさらに低い圧力までフラッシュ



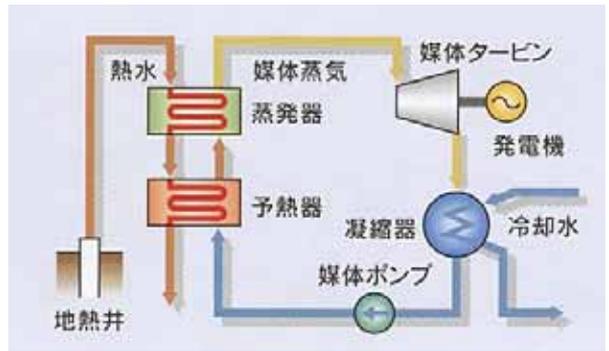
(a) 過熱蒸気型



(b) シングルフラッシュサイクル



(c) ダブルフラッシュサイクル



(d) バイナリーサイクル

図 54 地熱発電のサイクル

[出典] 九州電力(株) "Guide of Geothermal Power Plant"

させて2次蒸気を発生させ、これを蒸気タービンの途中段に混入させることにより出力を増加させるものである。バイナリーサイクルは地熱流体とは別の媒体を発電サイクルの作動媒体として用いる。このため、地熱流体と作動媒体との間に間接的な熱交換器を用いて作動流体を加熱し蒸発させる。

1977年(昭和52年)に世界初のダブルフラッシュサイクルとして九州電力八丁原発電所が運転を開始した⁽⁵⁵⁾。図55に1号55MWタービンを示す。中央から1次蒸気(高圧蒸気)、第2段目と第3段目の間から2次蒸気(低圧蒸気)が流入する。

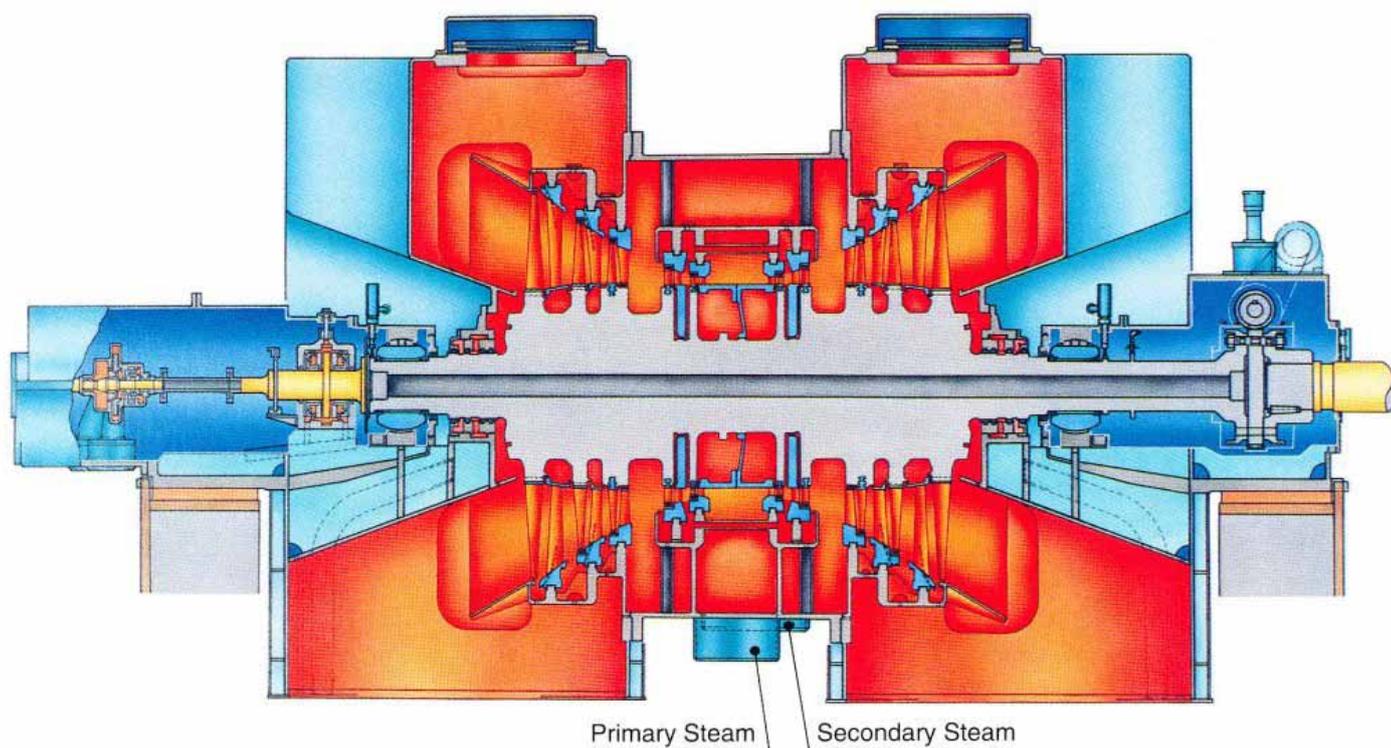


図55 九州電力八丁原1号タービン [提供] 三菱重工業(株)

米国カリフォルニア州ガイザース地区は蒸気卓越型であることもあって、早期(1960年)から地熱発電が行われている。この地区には日本製の大容量の地熱タービンが多数納入されている。(株)東芝は1975年に2車室の110MW機、1983年に124MW機を納入した。三菱重工業(株)も1983年に2車室の70.65MWタービンを納入した。このタービンは当時世界最長の25インチ最終段翼を有し、復水器の高真空化により高効率を記録した。

その後、ISBなどの新型長翼の開発によって、三菱重工業(株)(30インチISB適用)と富士電機システムズ(株)(697mmフリースタANDING翼適用)の単車室最大容量110MWタービンがインドネシア向けに納入された。最新の例では、富士電機システムズ(株)がニュージーランド向けに798mm翼を用いた139MW単車室タービンを納入した⁽⁵⁶⁾。

小型の地熱発電装置を工場で組み立て、分解することなくそのままトレーラーで据付け場所まで運搬できるポータブル地熱発電装置(ポータブルタービンと呼ぶ)も開発された。外部電源なし、冷却水なしで起動できる背圧式のポータブルタービンは、長期間を要する地熱発電所建設の工事用電源として使えるので便利である。

バイナリーサイクルのポータブルタービンとして、1977年(昭和52年)に当時の通商産業省のサンシャイン計画で、イソブタンを作動流体とする1MWの試験プラントが開発された⁽⁵⁷⁾。このプラントには作動媒体の圧力・温度・流量の条件に最適なラジアルフロータービンが適用された。本稿(その1)4.2.6項の図13(a)はこのタービンを示す。サンシャイン計画では同時にフロンR-114を作動流体とする1MWの試験プラントも開発された⁽⁵⁸⁾。1997年(平成9年)には経済産業省の中規模地熱バイナリー発電システム開発プロジェクトで代替フロンHCFC123を作動媒体とした490kWバイナリーサイクル発電プラントが開発された⁽⁵⁹⁾。これらの例はいずれも既設発電所の排熱水を利用するものである。

我が国では現在のところ大容量地熱発電所の建設は具体化していないが、ポータブルタービンを適用した小規模な地熱発電所を増やしていくことが重要になるであろう。バイナリーサイクルでは海外のメーカーが標準化したモジュラープラントを開発して、量産効果を発揮して世界各地に納入しており、日本のメーカーもバイナリーサイクルプラントの商品化に乗り出している⁽⁶⁰⁾。三菱重工業(株)では既に大気圧以下の蒸気でも発電できるGEO-PAC(湯気発電装置)⁽⁶¹⁾を開発済みであり、地熱蒸気直接利用プラントに対応できるのはもちろん、バイナリーサイクルでも、特殊媒体のみならず清水を媒体とした水バイナリーサイクルプラント⁽⁶²⁾にも対応が可能である。

参考文献

- (53) 藤川 卓爾, 齊藤 象二郎, 石黒 淳一: 地熱発電システム開発の歴史と現状, 地熱技術, Vol.33, Nos.1&2 (Ser.No.72), pp.57-69. (2008-5)
- (54) 火力原子力発電技術協会: 地熱発電の現状と動向 ,(2006)
- (55) 吉田 勝亮, 相川 賢太郎: 八丁原発電所におけるダブルフラッシュサイクル地熱発電の開発, 火力原子力発電, Vol.31, No.9, pp.63-77. (1980-9)
- (56) 堀江 理夫: ニューゼーランド カウエラウ(90MW), ロトカワ(130MW)地熱プラントの建設, 火力原子力発電, Vol.61, No.6, pp.13-19.(2010-6)
- (57) 相川 賢太郎, 福田 征孜, 田原 護: 地熱発電プラントの最近の実績, 三菱重工技報, Vol.15, No.2, pp.79-95. (1978-3)

- (58) THE SUNSHINE PROJECT BINARY CYCLE, TOSHIBA CORPORATION, (1984-8)
- (59) 浦 啓夫, 齊藤 象二郎: Geothermal Binary Power Generating System, World Geothermal Congress 2000, F8-3. (2000)
- (60) 小山 宏: 中低温度の地熱エネルギーを利用した地熱バイナリー発電システム, 平成 18 年度火力原子力発電大会論文集, 4-1. (2006-10),
- (61) 近藤 武志: 超小型ポータブル発電設備(ジオパック), 地熱技術, Vol.17, Nos.1&2 ,(Ser.No.40) ,(1992-3)
- (62) 榎林 利之, 浦 啓夫, 鈴木 哲也: 水バイナリー地熱発電システム, 地熱技術, Vol.28, Nos.3&4 ,(Ser.No.63), pp.35-46. (2003-11)

(つづく)

—— 京機短信への寄稿、 宜しくお願い申し上げます ——

【要領】

宛先は京機会の e-mail: jimukyoku@keikikai.jp です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。 MSワードで書いて頂いても結構ですが、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂く方が有り難いです。 割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。 宜しくお願い致します。

昭和55年卒 奥田 寛

台湾の「デルタ電子」という大手電気部品メーカーから「太陽光発電パネル設置事業」について我社に相談がありました。検討の結果、我社の受注にはいたりませんでした。私の属する阪急阪神グループ内の2社につなぐことができ、よかったと思っています。

さて、今回台湾の会社とお付き合いするに当たり、台湾の歴史について少し勉強してみました。従来から台湾には親日家が多いとは聞いていたのですが、その理由も分からず、昨今の中国の対日姿勢など、中国大陸にはまったく「親日」というものが感じられないのになぜ同じ漢民族の多い台湾人には「親日」の人が多いのか調べてみると、大変複雑な歴史があることが分かりました。もともと台湾という「島」は「国家」という体をなさず、複数の民族が住み、共通言語のない未開の地でした。東インド会社の拠点として一時期オランダの植民地になっていたようです。その後大陸の「清朝」の統治があり、日清戦争後「日本」の統治下になり、太平洋戦争の日本敗退で蒋介石率いる「中華民国」の統治下になり現在に至っています。ではなぜ親日家が多いのかというと、50年間にわたる日本の統治下の間にいわゆるインフラ（鉄道、病院、学校、治水等）の整備、教育制度の確立を日本政府が行ったことが現在の台湾の経済的な発展の基礎になっているの思いが台湾の人たちにはあるようです。日本が敗戦で引き上げた後、大陸から来た中華民国政府（蒋介石）に統治が変わると、大陸から来た「外省人」による政権下で「台湾人」が非常に抑圧されたことも「日本統治が懐かしい」との思いになっているようです。戦後の日本の教育では、日本の侵略を「悪」と決め付けていますが、台湾に関しては現地の考えは違っていたようです。

「李登輝」という名前は皆さんよくご存知と思います。そうです、台湾の元総督です。大陸から来た「外省人」が台湾統治のトップである「総督職」を受け継いだのですが、1990年に初めて台湾出身の総督が誕生しました。それが「李登輝」です。李登輝氏は非常に「親日派」で、来日した際は必ず日本語でスピーチをするそうです。通常侵略されていた国の人々が侵略者の言葉を使うことはありえません。ということは、「侵略されていた」という意識が皆無であることに他なりません。事実台湾にはいまだに「日本精神（リップチェンシン）」という日本を賞賛する言葉があるそうです。

先の東日本大震災に対して台湾からの義捐金が200億円を超え、世界のどの国

より多い額であったのも親日である証拠だと思います。現在日本と台湾の国交はなくなりましたが、民間レベルでは深い交流があります。少しだけ台湾について勉強しただけですが、なんとなく親近感がわいてきました。

お詫びとお願い

忙しさと老人ボケの進行とで、京機短信の発行が遅れ気味になっていることをお詫び申し上げます。向後、場合によっては月1回の発行になる場合も出てくるかと思いますが、何卒ご了解下さい。

原稿不足の状態が相変わらず続いています。適切な原稿が集まらない場合も発行を間引くこととなります。何卒、宜しくご投稿の程、お願い申し上げます。ただ、近頃はやっているブログにしばしばあるような、写真ばかりを多数枚貼り付けて、どこどこに行ってきたとか、こんなものを食べましたとか言うような原稿の掲載は、原則、難しいと思いますので、ご配慮下さい。個人的宣伝の臭いのするような原稿も原則ペケ、と言う基本方針は従来通りです。

宜しくお願い申し上げます。 世話人

1. 格差と経済成長の関係についてどのように考えるか

国立国会図書館 ref.No.769 (2015年2月)

<http://www3.keizaireport.com/report.php/RID/236860/>

米国で格差拡大の必然性を指摘した専門書が爆発的に売れ、日本ではデフレ脱却を目指した政策が格差を拡げているとの批判が台頭するなど、格差問題が国内外で注目を集めている。その論点は多岐にわたるが、マクロ経済政策の観点からとくに注目されるのは、「格差と経済成長の関係」をどのように考えるかであろう。この問題は、「経済成長が格差に及ぼす影響」と「格差が経済成長に及ぼす影響」とに分けて考える必要がある。

2. 「ピケティ」は人口減少の日本で成り立つのか

2015.02.20

年5%の「不労所得」はそう簡単じゃない

東洋経済Online

<http://toyokeizai.net/articles/-/61206>

昨年末、みすず書房から出版されたトマ・ピケティ著『21世紀の資本』が早くも13万部も売れたとか。なにしろ700ページ、5500円(税別)の大著である。最後まで読み通せる人は果たして何%いるのだろうか。筆者も購入して苦闘しているが、とても全部を読み通せるとは思っていない。が、読みもしないで、「私はこう読んだ」などと言っている手合いが非常に多い、ということだけはよくわかる。

3. ピケティの主張は的外れ、日本経済の問題は「低欲望社会」に尽きる

2015.2.18 Nikkei BPnet 大前研一

<http://www.nikkeibp.co.jp/article/column/20150217/435806/>

経済的不平等、つまり格差問題を扱った『21世紀の資本』が話題となっている。著者であるフランスの経済学者トマ・ピケティ氏は昨年春以来、世界的に有名になったが、昨年12月にみすず書房から訳書が出た日本でも注目されている。

4. ピケティの議論から考える日本の公的債務削減のあるべき姿

2015.2.17 Nikkei BPnet 伊藤元重

<http://www.nikkeibp.co.jp/article/column/20150216/435669/>

ピケティ・ブームが日本を襲った。世界的なベストセラーとなった『21世紀の資本』の邦訳が出た時期に合わせて、著者のトマ・ピケティ氏が1月末に来日したこともあって、どの雑誌も新聞もピケティ一色という感じである。私も大学のゼミ生と英語版を何度かに分けて読み合わせてみたが、大部なあの本を読みこなすのはなかなか大変なことだろうと実感した。

5 . 「日本のピケティ」？ 戦前の超格差社会に挑んだ高橋是清

2015.2.20 DIAMOND Online 松元崇

<http://diamond.jp/articles/-/67161>

最近ベストセラーになっているトマ・ピケティの『21世紀の資本』のメッセージは、資本収益率が成長率よりも高いので、資本を持つ富める者はますます富み、資本を持たない者はますます貧しくなる。そのようにして出来上がる格差社会を資産課税によって是正してやる必要があるというものである。

6 . 財政再建の妙薬は、増税ではなく「増収・インフレ税

2015.2.19 DIAMOND Online 高橋洋一

<http://diamond.jp/articles/-/66872>

2月16日に放送されたNHKニュースウオッチ9の「“預金封鎖”もうひとつのねらい」という特集が話題になっている。この時期に、明らかに財務省の取材協力を得たと思われる報道を9時のニュースで行ったというのも興味深い。

7 . 「物価上昇率2%」目標失敗で成長率がプラスに転じたという皮肉

2015.2.19 DIAMOND Online 野口悠紀雄

<http://diamond.jp/articles/-/66963>

先頃発表された2015年10～2月期のGDP速報値は、デフレ脱却を経済政策の目標とするのが誤りであることを明確に示している。物価が下落したために、GDP成長率がプラスに転じたのである。

8 . 17年ぶり名実逆転のGDP速報値が意味するもの

2015.2.19 DIAMOND Online 田中秀征

<http://diamond.jp/articles/-/67082>

「イスラム国」による人質事件に対する政府の対応を世論はどう評価しているか。直近の世論調査では、評価する人が多く、内閣支持率も上昇している。

9 . 10-12月期GDPは鈍い回復 景気動向には懸念材料も

2015.02.20 日経BizCOLLEGE 小宮一慶

<http://www.nikkeibp.co.jp/article/column/20150219/436123/>

2月16日に、10-12月期の国内総生産（GDP）速報値が発表されました。物価変動の影響を除いた実質での成長率は、前四半期比年率換算で2.2%。3四半期ぶりのプラス成長です。以前から本稿でも指摘していたように、日本経済は7-9月期に底を打ったと言えるのではないかと思います。4-6月、7-9月と2四半期連続でマイナスの後ですので、反発するのは当然とも言えますが、問題は、これからどう動いていくか、まだ鈍い回復ですが、これはいつまで続くのか、ということ

です。今回は、10-12月期のGDPを含めた主要指標を分析しながら、今後の景気動向を探ります。

10．原油安がこれからの日本経済に与える影響とは？

2015.02.13 日経BizCOLLEGE 小宮一慶

<http://www.nikkeibp.co.jp/article/column/20150212/435291/>

直近の企業業績を見渡しますと、原油安によって明暗が分かれていると感じます。石油元売りや総合商社などの資源関連事業を柱とする企業は、軒並み収益を落としています。海運や航空、電力などの企業は、燃料費の削減から業績が押し上げられています。原油安は、企業のみならず日本経済全体にも大きな影響を与えます。今回は、原油安が日本に与える影響を考えます。

11．異変とこれから

2015.02.19 現代ビジネス

11-1 「暴落説」が強まる一方で「株価2万5000円」は本当なのか

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/42149>

何かがおかしい!いったい何が始まろうとしているのか?株・円安・原油安!これほど先行き不透明な時代はない。先を読み違えれば取り返しのつかない痛手に苦しむ時代ともいえる。自らの身を守るには情報武装するしかない。何が起きるのか。プロたちが激論を交わした。

11-2 いつまでも続くわけがない

不気味なこの「円安」、実はプロもみなビビっている

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/42152>

異常事態とも言える円安進行の先には、落とし穴が?。為替のプロ、小口幸伸氏と山田勉氏が徹底討論。

11-3 喜んでいると痛い目に この原油安も、とても気持ち悪い

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/42153>

いま、世界経済を語る上で最も熱いトピック「原油安」は、日本経済にとって吉か凶か?永濱利廣氏と徳田秀信氏が激論を交わす。

11-4 住友商事「2400億円」、丸紅「1200億円」の減損

好調だったはずの大手商社が「大失敗」、潮目は変わった

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/42154>

巨大商社の業績悪化、シャープの赤字転落、マクドナルドの苦境……。アベノミクスは大企業に恩恵があるのではなかったのか。岡三証券日本株式戦略グループ長の石黒英之氏と、セゾン投信社長の中野晴啓氏が日本企業の異変を読み解く。

12 . 「官製相場」で株高は当分続くというが、死角はないか

2015.02.20 現代ビジネス 長谷川 幸洋

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/42185>

東京株式市場の株価が15年ぶりの高値をつけた。2月19日の日経平均終値は18264円と2万円の大台も射程に入れたかもしれない。株高は投資や消費を刺激して景気にプラスだから、株を持っていない人にも間接的に恩恵がある。はたして株高は続くのか。